

対話での問いかけ

新学習指導要領の実施を半年後に控え、多くの高校で「観点別評価」をどう実践するか、検討が進んでいます。なぜ観点別評価なのか、何に留意すべきか、何が難しさなのか等、下記の問いかけを基に、参加者は考えを深めました。

なぜ、観点別評価を行うのか？それにより、生徒をどう支援したいのか？

評価とフィードバックは、分けて考えるべきではないか？

評価の客観性・厳密性以上に、生徒の成長に繋がることが大切ではないか？

テーマ設定 背景

これまでの対話で、度々「評価をどう考えるか」という話題がありました。今回のテーマ「観点別評価」の導入についても、期待・問題意識ともに発言されていました。例えば、生徒の成長を支援する上では期待できるものの、評定として扱う際にどのように考えるべきか、などです。そこで今回はテーマを「観点別評価」とし、目指したいことや留意すべきことについて、対話を進めました。

話題提供 - 笠井 敦司 先生（青森県立青森高等学校） - ※関連するご発表はこちら

- ・やみくもにコンテンツに取り組みせる教育から、目的を意識したコンピテンシーベースへの転換が重要。
- ・生徒と教師の関係は、「弟子と師匠」から「プレイヤーとコーチ」に変わるべき。
- ・評価改善はシラバスの作成が前提。シラバスが用意できていないと評価に注力する背景が無いのと同義。
- ・単元単位で用いる自己評価シートは、質的に生徒が振り返ることが出来るように設計している。
量的な授業を行っている生徒は自己評価できない。自己評価しづらい授業は、改善できていない授業。
- ・定期テストは、観点別に出題比率を規定している。予定調和の暗記型作問をしないという校内の約束だ。
- ・一連の改革は「教務起点の学校改革」。管理職含む教員集団とは「教育課程編成の方針」として合意した。

話題提供 資料(一部ご紹介)

単元自己評価シートの路地裏

管理職 教務

単元自己評価シート（単元ごとシラバス）が組織的に設定されているのに、下段の授業をしてみよう、単元評価ができない。よってシートに基づいた単元設計をせざるを得ない。授業改善の直接的なレゾナンス。

目的合理性に基づく「質的」授業（振り返り/改善の根拠となる授業）

進捗・単位時間当たりの情報量・テスト範囲優先の「量的」授業

考査の路地裏での交通整理

定期考査の品質管理、平均点管理

3 設定平均点を実現するための目安

出題レベル	出題比率	設定平均点（得点率）
習得	60	4.0点（約65%）
活用Ⅰ	30	1.5点（約50%）
活用Ⅱ	10	4.点（約40%）

4 作題にあたって

- 1) 前回の一学期期末考査の平均点をもう一度確認し、「3」に掲げた目安を念頭に置き作題にあたる。
- 2) シラバスで提示してある各レベルでは能力の違いをベースに作題する。
- 3) 複数の担当者で作題する場合は、特に担当大問における「活用Ⅰ」「活用Ⅱ」の設問についてすりあわせを行い、大問ごとではなく、レベルごとの平均点設定を念頭に置いて作題する。

対話の声

- ・守るべきは学校の形ではなく、学校の理想。理想に向けた手法の一つとして評価を考えたい。（北海道）
- ・テストとフィードバックを切り離して考えることがポイント。その上で見取りはどう考えるべきか。（茨城）
- ・観点別評価は形成的評価の側面が重要だが、最終的に評定として総括的評価になる点で悩む。（神奈川）
- ・不完全でも、なぜ＝根拠が語れることが重要。精緻な評価より、成長を支援する評価を目指したい。（長野）

本プロジェクトへの「ご参加希望」「校内での対話型研修会のご要望」等は、運営事務局 ベネッセ教育総合研究所 次世代の学び研究室 (nextlearning@mail.benesse.co.jp)までご連絡ください。

本プロジェクトは、新型コロナウイルスの影響により全国の学校が休校せざるをえなかったことをきっかけに、有志により発足されました。プロジェクトでは、毎週行う学校教育活動に関する対話を通じて、「学校教育の革新と、生徒の気づきと学びの最大化」を目指しています。これまでに全国約100校から主に中高教員が参画しています。対話履歴はSNSでも発信しています。フォローください。[Twitter](#) [Facebook](#)

対話を振り返って

サレジオ学院中学校・高等学校 染谷諒 先生

定期的にこの対話に参加させていただき、様々な気づきや刺激を受けています。今回は「観点別評価」ということで、しっかり勉強しなければいけない、とっていたタイミングでの対話となりました。

観点別評価に対して、現場の教員が戸惑うような要因が2つあるように感じました。1つ目に、「現場教員が『総括的』に観点別評価を行ってしまう」ことです。おそらく多くの現場の先生方は、「評価」という言葉を用いるとき「総括的評価」の意味で使っているのではないかと思います。そうすると「定期試験で『学びに向かう力、人間性』が測れるのか」といった議論になりがちです。観点別評価はもともと「形成的評価」の意図で導入されたものであると理解しています。その趣旨に従えば、観点別評価を行うにあたっては、日々の授業の中での見取り、フィードバックが重要になるでしょう。2つ目に「観点別評価を評定と連動させる」ことです。適切なフィードバックのために生徒の自己評価の結果を利用して観点別評価をしようとする、それを評定に用いて良いのか、自己評価の信憑性をどう担保するのか、など疑義が生じがちです。しかもその評定を、調査書を通して大学入試で見られることになると、現場としては結局評定を先に決め、それに矛盾がないように観点別評価を決める状況になるように思います。

今回の対話の話題提供者である青森高校笠井先生の資料には、3 観点のルーブリックが入っているシラバスがあり、これをもとに「指導と評価の一体化」が実践されていることがわかりました。対話の中で笠井先生は「いきなり完璧な評価方法を提示する必要はない」「評価について、ストーリーを語れるようになっていれば良い」と強調されていました。そこからは「学校として生徒をこのように育てたい」から「このような評価方法をとっている」ということを生徒・保護者へ説明する勇気・覚悟のようなものを伺った気がします。

また、この対話では話題提供者の方の実践だけでなく、参加されている先生方の普段行なっている何気ない実践からも刺激を受けることができます。実践されている先生方は、普段から振り返りの時間を取る、自己評価のためのルーブリックを作成する、学んだことを自由に記述させるなど、様々な工夫をされています。

一口に自己評価と言っても、その妥当性を担保することの難しさも同時に感じます。ルーブリックを行動目標ベースに記述することも重要ですし、より客観的な発問を通して、自己評価と客観評価の認知の違いを埋めることも重要であるように感じます。そのためには相当の時間と労力が必要でしょうから、小さな実践を継続的に繰り返していく中で、自分にマッチするような評価方法を考えていきたい。そんなことを思う対話となりました。

本プロジェクトへの「ご参加希望」「校内での対話型研修会のご要望」等は、運営事務局 ベネッセ教育総合研究所 次世代の学び研究室(nextlearning@mail.benesse.co.jp)までご連絡ください。

本プロジェクトは、新型コロナウイルスの影響により全国の学校が休校せざるをえなかったことをきっかけに、有志により発足されました。プロジェクトでは、毎週行う学校教育活動に関する対話を通じて、「学校教育の革新と、生徒の気づきと学びの最大化」を目指しています。これまでに全国約 100 校から主に中高教員が参画しています。対話履歴は SNS でも発信しています。フォローください。 [Twitter](#) [Facebook](#)